『蒙求和歌』第三類本　本文〈一〉

――四季部――

小山順子・竹島一希・蔦清行・中島真理
濵中祐子・森田貴之・山中延之

はじめに

源光行作『蒙求和歌』の諸本は、池田利夫氏『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠』（笠間書院、初版・昭和四十九年、補訂版・昭和六十三年）第五章「蒙求和歌の伝本系統と諸本」によって、第一類本（平仮名本）、第二類本（片仮名本）、両者の混合本と言われる第三類本に分類されている。第一、二類本も含めた諸本全体の詳細は、池田氏著書を参照されたい。

第三類本は池田氏によって山岸徳平氏蔵本、三手文庫本、宮内庁書陵部蔵乙本が紹介されている。池田氏は、第三類本の特徴として以下のような点を挙げている。

・冒頭に漢文と和文の序を記す。
・巻末に第一、二類本と同じ跋文を記す。
・各巻ごとの冒頭に目録を記す。
・本文は漢字平仮名交じり文である。
・章段の実数は二五〇段である。
・章段の内容は第二類本に近い。
・「鐘離委珠」（冬）、「郝廉留銭」「長房縮地」（羇旅）、「勾銭投醪」（酒）、「劉寛蒲鞭」（雑）の五段は歌を欠く。
・歌のある二四六（ママ）段のうち、五四段では歌が二首挙げられている。
・第一、二類本で共通する章段において、歌や説話本文が異なっている場合、第三類本では第二類本にしたがっていることが多い。

『蒙求和歌』の本文は、第一、二類本がそれぞれ『新編国歌大観』第十巻に平仮名本（底本・内閣文庫蔵甲本）・片仮名本（底本・国立国会図書館蔵甲本）として収められている。そのほか、第二類本（片仮名本）の善本であり、『新編国歌大観』底本にも用いられている国立国会図書館甲本の影印が『附音増広古注蒙求・蒙求和歌』（中文出版社、昭和四十八年）に、また、同じく第二類本の一本である続群書類従本（巻四百五）の翻刻も刊行されている。しかし、第三類本については、第一、二類本が混合したものであり、後出の本文であることも明らかであるため、積極的に研究対象とされることはなく、翻刻されたものも無い。但し、第三類本の本文を明らかにすることで、

第一類本、第二類本の本文についても再考しうる点が多々存すると考えられる（なお、第三類本についての詳細な検討は本翻刻の末尾に付す予定である）。

本稿で底本として用いるのは、未紹介の新出本である山口県立山口図書館本である。山口県立山口図書館本は、豊富な注記と異本注記を有しており、以後、第三類本の本文を考察する上で有益な本であると考えて底本として採用した。

【凡例】

一、底本は第三類本に分類される山口県立山口図書館蔵『蒙求和歌』（所蔵番号 142、国文学研究資料館蔵マイクロ資料 60-50-1、C3683）に拠った。

二、翻刻凡例

・翻刻は底本ママを原則とし、合符以外はそのまま翻刻した。

・濁点、句読点を私に付し、漢字は通行のものに改めた。

・見消チ前の本文は〈　〉内に記し、その右に訂正後の本文を傍記した。

・底本の頭注は**【頭注1】**のように注記し、和歌のあとに掲げた。割注および傍記も複雑な場合は、**【割注】**・**【傍記】**のように注記し、あとに掲げた。

・ルビの訓点は（　）内、ルビのルビは〔　〕内に記した。割注内もこれに準じた。左ルビは（左：）とした。

・判読不能な箇所は、□を記し、推定本文を（　）内に傍記した。

三、読者の便を考慮して、以下の処理を施した。

・各段の冒頭に、通し番号と明治書院新釈漢文大系『蒙求上下』による蒙求標題、同蒙求標題番号、底本目録の歌題を記す（例・**1漢楚龍顔〈五二〉（立春）**）。

・和歌は、一類本（平仮名本）由来のものには、**（平1）**、二類本（片仮名本）由来のものには、**（片1）**のように、それぞれ新編国歌大観による歌番号を付した。完全には一致しない場合、**（片1）**のように記した。

四、**【校異】**として、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本（国文学研究資料館所蔵のマイクロ資料（ヤ3-6-4、C3700）に拠る）との対校を行った。ただし、本文における有意の異同のみを注記した。

五、翻刻・校異は次のような分担で行った。

小山順子……序・1～10
竹島一希……11～20
蔦清行……21～30
中島真理……31～40
濵中祐子……41～50
森田貴之……51～60
山中延之……61～71

担当箇所は相互に点検を実施した。従って、翻刻・校異については、執筆者全員がその責を負うものである。

本文と校異

蒙求和歌　并序

夫レ蒙求者李翰之所レ選也。述テ二数百家之事跡ヲ一以教レ人ニ。和歌者柿本之遺流也。聯テ二卅一字之篇什一以伝レ世ニ。如レ予者、素稟ニ愚

魯之性ヲ、雖レ疎ニ和漢之才一ニ、少日受テ訓説ヲ、壮年ニ求ム簡要ヲ、是以、〈誠〉(一)和ニ皇漢之曩行一ヲ、聊呈ス我朝之風俗ヲ。仮ニ男女於此文之中一ニ、訪ヒ言行ヲ於他書之外一ニ、寄テ其詞於花月一ニ、歌詠ニ二百五十首ヲ分テ其題ヲ於春秋一ニ、巻成シテ一十〈回〉(二)一ニ、偏ニ為ニ幼童之易カラン覚ヲ、不レ顧ニ耆老之所ヲ嘲一而已。于時元久甲子之歳、初秋壬申之月、朝議大夫源光行、閑居余暇概然記之云爾。

蒙求は李翰が意根よりおこりて、ふるきあとをあつめて人に伝へ、和歌は柿本の言葉より栄て、あらたなる諺(コトハザ)世にひろまれり。こゝに心(イナシ)(三)やまともろこしの道をたもり(四)、詞(イナシ)は(五)花と月との色(ど)にまどへるものあり。いとけなく○(し)て(六)此書をつたへよむといへども、竹の枝にむちをうちて、境をかへり見る事をわすれ、さかりの時、その心をさとらんとすれば、又、柳の葉をあむにものうくして、奥をきはむるに及ばず。中ごろは北闕の北に家をわすれて、霜をふみ星をい〈こ(た)〉ゞく(七)に暇なく、今は東邑の東にすだれを〈ふれ(とちイ)〉て(八)、雪をからげ(九)、蛍をとも〈に(と)〉する(十)にたよりあり。時【頭注1】に男女の名をひと巻の内にぬきいでゝ、かしこくをろかなるためしをあまたのふみの底よりうかゞひいでたり。歌二百五十をつらねて、巻一十○四(有イ)(十一)をなせり。【補入】〈たゞわが心のもよほすにまかせて、人のあざけりの被べきをかへりみずなりにけらし。としははじめの久し(十二)、○きはきのえのあき(十三)、のどけ(本不審)きみづのえの月なみとなんいへり。〉(十四)月なみに紫のさ〈ほ(をイ)〉げのふでをそめて、白きあさのかみにしるすとなり。異本(十五)

【頭注1】蒙求凡五百九十八人

【頭注2】元久元甲子土御門院

【補入】父のしるすところはふかしといへども、子のさとる所あきらむためしならし(十六)。

【校異】

(一)〈誠(武)〉 ―― 試〈岸〉
(二)一十〈回(四)〉 ―― 一十四〈岸〉
(三)こゝに心(イナシ) ―― こゝに心〈岸〉
(四)たもり(と) ―― たとり〈岸〉
(五)詞は(イナシ) ―― 詞は〈岸〉
(六)いとけなく○(し)て ―― いとけなくて〈岸〉
(七)い〈こ(た)〉ゞく ―― いたゞく〈岸〉
(八)〈ふれ(とちイ)〉て ―― たれて〈岸〉
(九)からけ ―― かゝけ
(十)とも〈に(と)〉する ―― ともす〈岸〉
(十一)巻一十○四(有イ) ―― 巻一十四〈岸〉
(十二)久し ―― 久き〈岸〉
(十三)○きはきのえのあき(と) ―― ときはきのえのあき〈岸〉
(十四)〈たゞ…いへり〉 ―― たゞ…いへり〈岸〉
(十五)月なみに紫のさ〈ほ(をイ)〉けのふでをそめて、白きあさのかみにしるすとなり。異本 ―― 月なみに紫のさほけのふでをそめて、白きあさのかみにしるすとなり。異本〈岸〉
(十六)父の…ならし。 ―― ナシ〈岸〉

蒙求和歌　第一

春部廿首

漢祖龍顔 立春　丁固生松 子日　孔光温樹 霞
干木富義 鶯　安国々器 梅　張敞画眉 柳
史丹青蒲 花　汲黯開倉 早蕨　戴封積薪 春雨
斉景駟千 春駒　王粲覆棊 帰雁　龔勝不屈 鳥子鳥
伯成辞耕 苗代　李広成蹊 桃　麋竺収資 燕
壺公謫天 薤菜　済叔不痴 鄭蜀　霊運曲笠 春花
劉寵一銭 款冬　薊訓歴家 暮春

【校異】

ナシ

1漢楚龍顔〈五二〉（立春）

漢楚龍顔（頭注）

高祖、姓は劉、名は邦、字は李。沛県の豊人也。母は劉媼、劉媼が夫は大公なり。劉媼、むかし、大沢の堤にやすみふしたるところに雨ふり神なりけり。夢のうちに神に嫁げり。大公ゆきてみるに、龍そのうへにあり。劉媼これよりはらみて高祖をうみてけり。高祖むまれて龍顔あり。鬚髯（ゼン）よし。左のもゝに七十二の黒にあり（一）。時に呂公（リ）といふ人（シ）あり。賢才世にきこえてけり（二）。国の老父酒をもちてきたりあつまりて、常に宴飲して世の中の事を〈つ〉ひあはせけり（三）。高祖わかくいやしくてのころ、きたりのぞめり。座中の人をの〳〵あざむきわらひて、この座には千の金をもたざる人は来事なしといひて、むしろのすゑにすへてけり。上客呂公しば〳〵高祖を見て驚て座よりくだりて、高祖の手をとりて、臣はわかくより好て人を相じき。相ずるところたがふ事なし。君、天子の相ありと云て、座の上にすへてけり。ねんごろにかたらひてわがむすめをあはせんと契てけり。座中の人、目をおどろかさずと云事なし。呂公が妻、大にうけざりけれども、みるところありと云て終にむすめを高祖にあはせてけり。一の男、両の女をうめり。呂公みちの辺に屋舎をたてゝ物うる由をして高祖をかくしすへてけり。舎屋は秦の東南にあたれり。秦始皇帝、東南に天子の気ありといきど〈な〉り（四）給へり。呂公いよ〳〵恐けり。舎屋をさりて芒碭山（五）の巌の中に隠れぬ。妻たづね来れり。おどろき問に、紫雲をしるべにてきたれりといふ。高祖あはれと思しりぬ。高祖ゐる所、ことに紫雲聳けり。時に秦皇崩じて、丞相趙高よをとりて、秦皇の長子扶蘇をうしなひて、弟の胡亥を王として二世皇帝とす。趙高心にたがふ事やありけん、わが威の〈な〉どを（六）しらむとて鹿を馬と云に、群臣みな趙高が詞にしたがひぬ。さて二世帝をうちつ。二世の兄扶蘇の子、子嬰のいとけなきを王として、国既みだれぬ。趙高、子嬰にうたれぬ。子嬰位にある事わづかに四十六日也。楚の壊王、この事を聞て、項羽を大将として（七）高祖を次将として秦の国をうちにつかはす。項羽と高祖と兄弟の契をなして、さきにいらむ人、宮中を行ふべしといひさだめて、高祖先に入といへども、項羽後に入て、契をたがへて万余里をとりて我まゝにせり。高祖千里をとれり。壊王をあふぎて皇帝とすべきところに、項羽地を〈え〉て（八）壊王にしらせずして、をのが諸将にわかちあたへて、はてには壊王をうちころしつ（九）。高祖ふかくかなしび〈恒〉て（十）、天にかわり（十一）項羽をうたんと思ひなりぬ。僅に百余人の将をもちて、百万のいくさにあら

そひたゝかへり。項羽四面をかくみて、高祖あやうくみえけり。○時歟に(十三)逆風吹て四方俄にくれぬ。其まぎれにのがるゝ事をえたり。営陽に年をかさぬといへども、陳平張良がはかりごとをもちて、遂に項羽をせめほろぼして(十三)天下をえたり。高〈祖〉皇帝(十四)とす。父大公をば太上皇帝とす。それ天に無二二日一、地無二二主一。大公は父たりといへども人臣也。高祖は子たりといへども人主也。人主をして人臣を拝すべきにあらざるが故に、大公みづからおりて高祖を拝せしむ。凡政を行ふ事、仁徳をほどこし給へり。賢者をすゝめ讒者をしりぞけ、能をほめ忠を賞し給へり。かくて四海たひらぎ万民たのしめり。春は和暖の気とゝのほり、秋は清涼の景そなはれり。すべて高祖より献帝にいたるまで子孫をかさぬること、廿七代四百十八年也。

あめのした行すゑとをき春の色はさはべのくさにあらはれにけり（平1）

めづらしき春のあさ日はむらさきの雲間を出し光也けり（片1）

【頭注】

于茲所引註、今流布非蒙求註。盧充幽婚註云、旧註引二孔氏志怪一曰云。

【校異】

(一)黒にあり ―― 黒子あり〈岸〉
(三)きこえてけり ―― きこえて〈岸〉
(四)〈つ〉ひあはせけり ―― いひあはせけり〈岸〉
(五)いきと〈な〉り ―― いきとほり〈岸〉
(五)苞碭山 ―― 芒碭山〈岸〉
(六)なとを ―― ほとを〈岸〉
(七)大将として ―― 大将とし〈岸〉
(八)えて ―― えて〈岸〉
(九)うちころしつ ―― うちころし〈て〉〈岸〉
(十)〈恒〉て ―― 慎て〈岸〉
(十一)天にかはり ―― 天にかはりて〈岸〉
(十二)みえけり。○時歟に ―― みえけるに〈岸〉
(十三)ほろほして ―― おとして〈岸〉
(十四)高祖皇帝 ―― 高皇帝〈岸〉

2丁固生松〈二一四〉（子日）

呉志丁固生松　【割注】

丁固尚書たりし時、夢のうちに腹のうへに松おひたりとみて、人にかたりていはく、松の字は十八公なり。十八歳にして公たらむといへり。つゐに夢のごとし。

とゝせあまりやとせの春のゆめさめて子日にあへる松のあけぼの（平2）

とゝせあまりやとせふりにし夢ぢより子日の春にあふの松ばら（片2）

【割注】

楚漢の代人。為二項羽将一。漢書云、丁公、名は固、季布が母弟也云々。

【校異】

ナシ

3孔光温樹〈三五四〉（霞）

前漢孔光温樹

漢の長楽宮に温室あり。孔光尚書令としてつかへけり。家にて兄弟妻子など物語するに、朝省の政の間の事を露ばか〈ら〉(一)もらす(二)事なし。ある人、温室省のうちの樹はなにの木ぞとゝへば、もだして答えず。さらにあらぬ事どもをいひまぎらはしつゝ、それをももらさずぞありける。

おほかたのなをさへはなにちらさじとおもひこめけるやへがすみかな（平3）

みやま木の名をだにあだにもらさじと思ひこめけるやへ霞哉（片3）

【校異】

（一）はか〈ら〉 —— はかり〈岸〉

（二）もらす —— もちらす〈岸〉

4干木富義〈三一七〉（鶯）

淮南子干木富義

段の干木隠居して、世のまじはりをこのまざりけり。魏の文侯(一)、干木が家をすぐるごとに、車よりおりずと云事なし。人々この事をあやしみけり。君いやしくも国の主としてたやすく人をうやまふ事、其心をえがたしといふ。文侯(二)の云く、我は財にとめり。干木は義にとめり。この故に義をうやまふなりとぞ答へける。

うぐひすの身にしむこゑをこめつればたにの戸をさへあだにやはみる（平4）

鶯のあるじなりけるたにのとをみすてゝたゞにすまん物かは（片4）

【校異】

（一）（二）（三）文侯 —— 文隻〈岸〉

5安国国器〈四五二〉（梅）

前漢安国々器

安国梁の孝王につかへて中大夫たりき。才智ふかゝりき。財をむさぼりたしなまず。我身よりかしこきものを求てしるべとして、君につかへけり。いはゆる台卿（已上）・遂臧（已上）・固邦（已上）・郅他（下）（非本文）みな天下の名士也。このゆへに安国をくにの器といへり。

こゝろあれやまだみぬ里の梅がゝを花なきやどにさそふ春かぜ（片5）・（平5）

【校異】

ナシ

6張敞画眉〈五四一〉（柳）

前漢〈張（張）敞画眉 平陽人。

張敞、京兆尹たり。経術にあきらかなり。ところ〳〵に賢をあらはし、善をほどこせり。人の咎をなだめ、事にふれて情ふかゝりき。女の眉をよくつくりければ、長安中に張京兆が画眉と

ぞほめつたへける。ありとある女、このみまなびけり。
みるからにこゝろうつさぬ(一)人ぞなき柳のまゆのあけぼのゝいろ（平6）
心をぞたれもそめけるさほひめの柳の眉の曙の色（片6）

【校異】
(一)うつさぬ ―― うつりぬ〈岸〉

7史丹青蒲〈二〇五〉（花）
前漢史丹青蒲(一)

史丹あざなは君仲、魯国の人也。賢人としてしかも忠臣たりき。頻によにつかえけり。うつりて侍中たり。時に漢の元帝、太子をすてゝ定陶王に位をゆづらんとす。此事世に聞へて、人おほきにかたぶけども、詞をいだすものなし。史丹おほやけの御とのごもれるうちに入て、青蒲(二)の上にふして、皇儲さだまりしうへに横ざまの政いできたらば、すでに世の乱となるべしと、なく〳〵いさめ申ければ、公これにしたがひ給ひにけり。青蒲(三)はあをきがまのむしろ也。后にあらざる人はのぼらずといへり。
いづかたに花のあるじをたづねけん春のみやまのみちをわすれで（片7）・（平7）

【校異】
(一)(二)(三)青蒲 ―― 青蒲〈岸〉

8汲黯開倉〈五一三〉（早蕨）
前漢汲黯開倉

汲黯は濮陽(一)の人也。汲黯にいたるまで七代(十本文)卿大夫たりき。時に河内に火ありて千余家やけにけり。公、汲黯をつかはしてみせられけり。かへりまいりて申て云く、河内の火屋をならべてやけつきぬ。なげくもの数をしらず。又河内をすぐるに水旱をうれふる貧き物万余家あり。臣謹て御使の使をみて(二)倉の粟を開てこと〴〵くにわかちあたえをはりぬ。臣すでにあやまてり。矯制の罪にをこなはるべしと申せり。おほやけ賢なりとほめ給てなし(三)。
あめそゝくはるのめぐみのなかりせばやけのゝわらびものうからまし（片8）・（平8）

【校異】
(一)濮陽 ―― 淮陽〈岸〉
(二)みて ―― えて〈岸〉
(三)なし ―― 罪なし〈岸〉

9戴封積薪〈五一一〉（春雨）
後漢戴封積薪

後漢の戴封、西華の令たりし時、天ひさしく日てりて、民悉く農耕のむなしく断ぬる愁をいだきけり。戴封、我行ふところの乱るゆへに天のとがめ給なるべし。わがなからむには、雨もふり民も豊になりなんと云て、薪を積て其上に臥て焼しなんとす。すでに火を放つ時にのぞみて、天これがために大に雨をくだしけり。
身にかへてか(稼乎)を(一)おしみける涙かなやよひのそらの雨とひとつに（（平9））

【行間書き入れ】(三)

【行間書き入れ】
雨さそふやよひの空は下もえの煙よりこそくもりそめけれ（片9）

【校異】
(一)かを（稼平）――かを〈岸〉
(二)【行間書き入れ】――雨さそふ…そめけれ〈岸〉

10斉景駟千〈五一五〉（春駒）
論語斉景駟千
斉の景公の馬千駟あり。しぬる時、其徳をいふ人なかりきといへり。駟千（非本文）は四千疋（也）。馬四疋を為レ駟也。
はるくさの野がひの駒もなき跡ののりのしるべとならばこそあらめ（（片10）・平10）

【校異】
ナシ

11王粲覆碁〈四七〇〉（帰雁）
魏志王粲覆碁(一)【割注】
魏の王粲、大臣にいたる。わかゝりし時、人とつれてものへゆく。道のほとりにして碑文をみる。つれたる人の云、汝この碑の文一たび見てそらにおぼえてんやといふ。王粲うしろむきてそらに誦するに、一字もおとさず。王粲むかし、囲碁(二)の局をやぶるを見る。王粲もとのごとく石をおきてけり。人これを信ぜず。更に石をおきて一たびみせて、うしろむきて他局に石をかせて並（ナラベ）てみるに、石ひとつもをきたがへず。すべて一たびもきゝ一たびも見つる事を、わするゝ事なかりけるなり。
うちみだれ霞にきえてゆく雁のおなじあとをぞおもひつらねし（片11・平11）
囲碁（非本文囲）〈有二帰雁之勢一〉故云。

【割注】
山陽人也。祖曽並（非本文）〈為三漢一王公一〉。

【校異】
(一)王粲覆碁――王粲覆碁〈岸〉
(二)囲碁――囲碁〈岸〉

12龔勝不屈〈一七三〉（喚子鳥）
前漢龔勝（ロウ）不屈【割注】
漢の龔勝、こゝろ賢にして名節をあらはせりき。光禄大夫たりき。漢の平帝かくれ給て後、宣帝の玄孫孺子嬰即位の時、王莽先帝のしうとゝして摂政たりしほどに、嬰をすてゝ（うちてイ）王莽みづから位につきての比、心ある人をの〳〵にげ（か）くれて是にしたがはじとす。春は日てり水たえて東作をわすれ、秋は風あらく蝗ふりて西収をゝこたれり。道をしれる人なかりければ、行ふところみだれて国おさまれる時なし。民つかれ兵うへて、金一両のあたひ(一)米三升になりぬ。此時に龔勝ふかくこもりゐぬ。王莽、人のなき事をうれへ、龔勝（本文）を講学祭酒になしてつかはんと

すれども、やまひの由を答てしたがはず。後に、大師の官綬を以て、郡守龔勝が里に入て致レ詔。なをかさねてわづらへるよしをもらして、東かしらにして朝服をきて使に語て云く、われ漢の厚恩をうけて報ぜんと思に、年すでに老たり。豈以二一身一事一二姓、地下見二故主一哉(一)。朝に来り暮来て(二)いざなうともいづべからずといひて、まさにしたがはず。又任承君と云賢人あり。身をたばふ心ありて、王莽にしたがはずして籠ぬ。王莽ふか〈や〉(四)此事を歎て頻に召いださんとすれども、いつはり清盲をつくりていでず。親き疎き、みなまことゝ思へり。小児の謬て井に入を見れども、宿業かぎりありてたすからざらむものゆへ、助けんとせば我いつはりあきしゐあらはれなんと思て、みずがほにてやみぬ。妻いよ〳〵まことゝおもひなりて、承君が目のまゑにしてまおとこにあへり。みれども露ばかりも色にいださず。かくてのみすごしけり(五)。時に漢の高祖の九代の孫光武、ほかに武威あり。内には仁恵ありて人民悉く帰しけり。軍をゝこして(六)王莽をうちてけり。隠れ籠りし聖賢の人、芸能の輩、こゝかしこより出ぬ。乱たりし政を改て仁徳を行はれけり。いつしか世おさまり人よろこべり。一茎の種をうへて九穂の粟をなせり。殊に賢才を賞しふかく讒佞を退けられにけり。

なにとかくおもはぬ山によぶこどりこしかたにのみかへるこゝろを（片12・平12）

【割注】

王莽（非本文）〈成帝の舅王曼之（子）。初封二新都一侯以レ女為二平帝后一、進封二安漢公一。遂二即改二元一建国一、在位十五年或十八年。

【校異】

(一)金一両のあたひ ―― 金一両あたひの〈岸〉
(二)豈以二一身一事一二姓地下見二故主一哉 ―― 豈以二一身一事一二姓二下見二故主一哉
(三)暮来て ―― 暮ニ来て〈岸〉
(四)ふか〈や〉 ―― ふかく〈岸〉
(五)すこしけり ―― すくしけり〈岸〉
(六)軍をゝこして ―― 軍をこして〈岸〉

13伯成辞耕〈五四七〉（苗代）

荘子 伯成辞耕

伯成あざなは子高、諸侯たり。堯天下をおさめて舜に譲給。舜又禹にさづく。禹又子高に譲といへども、世の中をよしなき事に思ひとりて、子高、諸侯を辞して、田を作てしづかによをわたりけり。

こゝろをばなはしろ水にさそはせてよをうき草【傍記1】のねをたえてける【傍記2】（平13）・【傍記】（（片13））

【傍記1】

ながしつる（ゝカ）イ（一）

【傍記2】

世にすむみちをおもひかへし〈て（つ）〉イ（二）

【校異】

(一)なかしつる（ゝカ）イ ―― なかしつるイ〈岸〉

(二)世にすむみちをおもひかへし〈て〉ィ ―― 世にすむみち
をおもひかへしてイ〈岸〉

14李広成蹊〈一六八〉(桃)

前漢李広成蹊 **【割注】**

李広、ゆみやの道にかしこかりければ、戦の功よゝにかさなりて将軍にうつされにけり。大史公が云、余観二李将軍一ヲ侑(シュン)々如二鄙人一ノ口不レ能レ道(出本)レ辞といへり。死る時、天下にしるもしらざるも是をおしみてかなしみをつくせり。よの人諺に云、桃李不レ言自(ニ)成レ蹊ヲ(ドモ)といへり。李(傍記)将軍、おやを虎にくはれて野べをゆくに、草の中に虎ありと見て、是をいつらぬきてけり。其(非本文)矢、飲羽といへり。近くよりてみれば、虎にはあらず、大なる石なりけり。石と見て後にいるに、其矢たつことなし。おやをくらひし虎と思ていけるによりて、石をいつらぬけるなり。

もゝのはなものいふことはなけれどもいろにいでゝぞ人をさそひし
ものいはぬ花も人めをさそひけりみちもさりあへぬ(二)もゝの下哉 **(片14)**

【割注】

隴西成(紀)レ紀人也。(三)

【傍記】

本文出猟(ス)トイヘリ。

【校異】

(一)自 ―― 目〈岸〉
(二)さりあへぬ ―― さりあへ〈す〉(ぬ)〈岸〉
(三)隴西成レ紀人也 ―― 瀧西成犯人也〈岸〉

15麋竺収資〈四三七〉(雉)

蜀志麋竺収資

麋竺、むかし(拠神記之説)、京より車に乗て家にかへる。いまだ家にいらざる事数千里なるに、一人のわかき女、かちより歩くるにあへり。麋竺あはれびて車にのせてけり。此女かへらむとするにのぞみて、我はこれ天の使として東海の麋竺が家をやきにゆくなりといふ。麋竺あさましと思ひてまどひ帰て、家の中の財を運出て人をいだしてまつに、日中に火いできて家やけにけり。

子をおもふきゞすや野べにまよはましやくべき春をかねてしらずは **(平14)**
いかばかり子を思ふきゞすまよはましやくべき野べをけふ〈ぞ〉(と)(一)しらずは **(平15)**

【校異】

(一)けふ〈そ〉(と) ―― けふと〈岸〉

16壺公謫天〈三二五〉(董菜)

後漢壺公謫天

壺公は其姓名をしらず。汝南の費長房は市の掾なり。時に薬をうる人あり。薬をうるに直を限事なし。一のつぼを屋のうへにをきて、日入て後にとびて壺の中にいる。人これをみる事なし。長房のみぞ楼の上にゐて見ける。たゞものにあらずと知ぬ。壺

を身にし〈て〉がふる(一)ゆへに壺公と云也。長房、壺公がゐたるあたりを掃ひきよめて餅をすゝむる事、たびかさなりにけり。壺公、長房がなさけを思ひしりぬ。日の入ほどに長房をよびて、我つぼにいらむを見て、われと共にをどりいれとをしふ。長房ともに壺に入ぬ。内に楼観五色(本文无)にして重門閣道あり。左右侍者おほし。壺公が云、我は仙人也。天曹職をつかさ取て、すぶる所おほし。つとめをこたる事あるゆへに罪をえて謫せられて、暫く人間に来れる也と云て、仙術をしへんと(二)契れり。

たび人のやどかる野べのつぼすみれおもはぬ春の日かずをぞつむ（片16・平15）

【校異】

(一)し〈て〉かふる ―― したかふる〈岸〉

(二)仙術をしへんと ―― 仙術をおしへんと〈岸〉

17 済叔不癡〈三九一〉（躑躅）

晋書 済叔不痴　晋代太原人也。身の長七尺八寸。龍の額、大なる鼻あり。

王湛、あざなは処冲といへり。賢才人にすぐれたれども、色にあらはす事なければ、兄弟家族といへども、王湛を痴なる者と思へり。父昶(世説反云帳)ひとりのみ是をしれりけり。父(一)死て後、墓(本文无)の辺にいほりをむすびて、門を閉て閑によをすぐして、世の交をこのまずして、昔を恋つゝ涙をながしてあかしくらしけり。王湛が兄子済(三)と云ものあり。王湛が許にゆきて見ければ、床のほとりに周易ありけり。本おもひあなづりける心にて、是をば何にゝかはせんと問へば、王湛あざわらひ、思ふところあるにゝたり。遂に易を論じて、済つまりけり(三)。武帝、済を見給ふごとに嘲て、汝が(四)家の痴叔はしにきや、いまだ○やと問ひ給へば、済こたへ申かたなし。後になをとひ給時、臣が叔ことにをろかならざりけり○申由(五)。かさねて誰とかひとしき〈き〉(六)問給けり。済申て云、山濤已下、魏舒(ヨリ)已上と申けり。これより名をあらはせり。

やへこむるかすみのそらのいはつゝじいはねばこそあれふかき心を（平16）

ふみかよふ山ぢとだにもいはつゝじいはねばこそあれふかき匂を(七)（片17）

【校異】

(一)父 ―― 〈文(父)〉〈岸〉

(二)兄子済(サイ) ―― 兄子(ライ)済〈岸〉

(三)つまりけり ―― つまりにけり〈岸〉

(四)汝か ―― 痴(汝)か〈岸〉

(五)申由 ―― 申〈岸〉

(六)ひとしき〈き〉(と) ―― ひとしきと〈岸〉

(七)匂を ―― 匂をィ〈岸〉

18 霊運曲笠〈三〇七〉（藤花）

世説新語 霊運曲笠

謝霊運、このみて曲柄の笠をもちゐけり。孔隠士そしりて云く、汝が心にすなほならむ事を思へり。曲れる物をすてざる事、汝が身にゝずといへり。霊運答て云、己が身のかげをぢにくむ人ありき。をのがゝげをゝづべき物にあらず。至て愚なる人といひつべし。曲れる笠は枯木のまどひまがれるなり。心のまが

れるにあらず。もし枯木のまがれるかげを嫌ひ(一)にくまば、是則かげを畏し類也(二)。我は身の影をゝづる心なれけば、曲れる柄の笠をすてずといへり。

影をゝづる人と云るは、昔漁父の孔子ニ申て云く、かげをみてわげ(三)走人あり。足をあげてはやく走に、影も随てはやく(四)身をせめて弥はしるに、我は尚をそく、をふものははやき心ちして、力をつくして走に、息たえて死ぬ。いたりてをろかなるためしをいへるなり。

みかさ山まつのよこみ(五)をいまぞしるいろこきふぢのしたのこゝろを（平17）

【校異】

(一)嫌ひ ―― 嫌〈て〉〈岸〉
(二)類 ―― 類〈岸〉
(三)わけ ―― にけ〈岸〉
(四)はやく ―― はやし〈岸〉
(五)よこみ ―― よこえ〈岸〉

19劉寵一銭〈五七九〉（款冬）

後漢劉寵一銭

劉寵、会稽の守にうつる。後に〈古〉て(一)為ニ将作大匠一おもむきけり。若耶渓の中に、五六の老翁の、年みな七八十ばかりなる、あひひきゐて劉寵を送けり。各銭百づゝをもちたり。劉寵、これをと〈し〉ば(二)人の財を貪るにゝたり。是をとらずは人の志をうしなふになりぬべしと思へり。時に人ごとにひとつの銭をぞ取てける。国にゐる(三)程の人費を惜て人の許へゆくことも なかりければ、夜ほゆる犬もなしといへり。後に召て為ニ将作大匠一(四)。

ひとふさを家づとにせしやまぶきはゐでのかざしのなもぞおるとや（平18）

家づとに一ふさおりし山吹の花に色あるゐでのたび人（片19）

【校異】

(一)〈古〉て ―― 召て〈岸〉
(二)と〈し〉は ―― とらは〈岸〉
(三)ゐる ―― ゐたる〈岸〉
(四)為ニ将作大匠一 ―― 為将作大〈将〉ィ〈匠〉〈岸〉

20薊訓歴家〈三二六〉（暮春）

神仙伝薊訓歴家（左：ケイ）　後漢の人也。

薊訓は斉の国の人なり。心ある人、薊訓が道に賢き事を知て、各ゆかしく思て、争かあひみんと云に、次の日(一)、廿三家に同時に来れり。家ごとに顔の色も衣の色もかはらず、身をわけゝるなるべし。後に駅に(二)乗て東をさしてかへりさるに、貴人各馬をもて遂ゆく事半日、をの〳〵疲て帰にけり。薊訓、昔隣人の児をいだきて、とりはづしておとしてしにゝけり。母さけび泣てうづみてけり。次の日(三)、薊訓ゆきてほり出して、いきたる本の児をいだきて母に返しけるに、母まことゝも思はず疑をなすといへども、児おやをしれり。かはる事なかりければ、かぎりなくよろこびけり。

こち風のかへるくもぢをしたひきてなごり身にしむあふさかのはる

やどごとにおなじなごりを忍ぶかな春の別の夕暮の空（（片20））

【校異】
（一）次の日（そカ）――次の日〈岸〉
（二）駅（青窟ラ）に――駅に〈岸〉
（三）次の日（二十余日トアリ）――次の日〈岸〉

蒙求倭歌第二
夏十五首

辛毘引裾（更衣）　孟嘗還珠（卯花）　漆室憂葵（葵）
樊噲排闥（水鶏）　漂母進食（郭公）　時苗（留）○犢（菖蒲）
常林帯経（早苗）　高鳳漂麦（晩立）　陸績懐橘（廬橘）
車胤聚蛍（蛍）　卞和泣玉（蟬）　田単縦牛（蚊遣火）
黄香扇枕（扇）　西施捧心（夕顔）　魏顆結草（夏草）

21辛毘引裾〈七〇〉（更衣）

魏志辛毘引裾　【割注】

辛毘（一）、潁川の人也。おほやけ、冀州の人戸を河南に遷さんと仰られけるを、□（高）も（二）賤もうれへなげきけり。辛毘、侍中として人の愁をかへりみて諫め申に、おほやけ、御気色たがひて立て入給を、御裾（モスソ）をひかへて、君を思ひたてまつるゆへに、世の痛みを申也。是をもちゐ給はざらん事は我身のためにあらずと、なく〳〵諫申けるに、哀とおぼして此事をとどめられにけり

たがためもうらなかりけりなつごろもよをはぐゝみしなさけのみかは（片21）

【割注】
私云、魏（三）辛毘、字ハ佐治也。

【校異】
（一）辛毘――辛毘は〈岸〉
（二）□（高）も――高も〈岸〉
（三）魏――魏ノ〈岸〉

22孟嘗還珠〈四七三〉（卯花）

後漢孟嘗還珠

後漢の孟嘗、字は伯周といへり。合浦の大守たり。郡には田などつくる事もなし。珠ばかりを財として世をわたるところなり。さきのつかさ、政よこさまにして、人をわづらはし、珠をむさぼるゆへに、人しりぞき、珠交趾にうつりにけり。孟嘗、心清潔にして貪ところなきゆへに、退し（一）来れり。さりにし珠（二）かへりにけり。郡とみさかえて昔のごとしといへり。

あれはてしかきねのうつぎ（三）花さきてむかしにかへる玉川のさと（（片22））

【校異】
（一）退し――退し人〈岸〉
（二）さりにし珠――すみさりにし珠〈岸〉
（三）うつき――う〈え（つ）〉き〈岸〉

23漆室憂葵〈二六四〉（葵）

古列女伝漆室憂葵

魯の漆室の女は、時をすぐるまでおとこにも見えざりけり。夕の空の心細きに、柱によりかゝりてうそぶきたてりけるを、隣婦あやしと思て、何事にうそぶきかなしむぞ。人の恋しきかと問に、我魯の君の老衰て太子のいと〈な〉なき(一)事を愁るなりと(二)答へけり。隣婦が云、それは大夫の愁なり。汝がことにをよばずといへり。女の云、しかはあらず。昔よのおさまらざりし時、晋の客わ我が家にやどりて、馬を苑の中につなぎしに、馬はなれて葵をふみからしき。我年をふるまで葵にともし。我兄隣女をゝふ。道にして水にをぼれて死き。我身ををくるまで兄なし。みなこれよのしづかならざるゆへなり。我きく、河浸(潤流布本)二九里ヲ、漸如(三)三百歩。今魯の君老衰給て、太子はまだ(四)いとけなくおはします。国乱て君臣父子その辱をかうらんに(五)、婦人ひとりのがるべきにあらずと答けり。

いかにしてのどけきみよにあふひ草そのかみ山をおもひしるにも（片23）

ありしにもあらぬおもと(六)にあふひ草昔をかけて忍けふ哉

（平21）

【校異】

(一)いと〈な〉なき —— いとけなき〈岸〉

(二)愁るなりと —— 愁(愁)るなりと〈岸〉

(三)如 —— 珈〈岸〉

(四)太子はまだ —— 太子いまだ〈岸〉

(五)かうらんに —— かふゝらんに〈岸〉

(六)おもと —— たもと〈岸〉

24樊噲排闥〈六九〉（水鶏）

前漢樊噲排闥

樊噲は沛国の人也。漢の高帝(一)の忠臣たりき。高帝位につきて天下を取て後、病ありとて、人のおほく参事をにくみて、一人のつかさ人を身にそへ給て、勅を下て門戸をまぼらせて群臣をいれられず。樊噲よのため是を歎て、推て門戸を開て近く進み参て、涙をながして諫申て云、君の世をとり給し始より、したがひつかへて忠ありき。天下すでに定まりぬ。君その御病を(二)大臣をぢおそれ申。群臣にまみえ給て(三)共に謀をめぐらし給べき処に、一人をのみちかづけて、群臣にうとまれ給はむ事の心うく悲也。昔趙高がゆくゑをばしり給はずやと奏するに、おほやけわらひておきゐて、是にしたがひ給にけり。

かきくらす心のやみもあけにけりまきのいた戸をたゝくくひな(四)に（平22）

【校異】

(一)高帝 —— 高祖(帝)〈岸〉

(二)君その御病 —— 君の○(御)病〈岸〉

(三)まみえ給て —— みえ給て〈岸〉

(四)たゝくくひな —— たゝくひな〈岸〉

25漂母進食〈三二三〉（郭公）

前漢漂母進食

流布本ト違アリ。韓信は淮陰の人也。わかき時、家まづしかりけり。下邳と云所に行□□(きて)(一)家をつくりけるに、漂母来て韓信をうやまひあはれびて、をのれが家に入てやそめ(す)(二)なぐさめ、食をすゝむる事、日数かさなりにけり。韓信、是がなさけを思知て、報せんと云に、漂母が云、我王孫を哀むゆへに、君が事のをろそかならざるなり。報ゐん事をばのぞまずと答けり。後に韓信、楚王として下邳に都として、漂母を召て百金を給ひけり。

あはれこそ(三)おもひしりけ〈り〉(る)(四)ほとゝぎすかたらひなきしいにしへのこゑ（（片24）・（平23））

【校異】

（一）行□□(きて)　――　行て〈岸〉

（二）やそめ(す)　――　やすめ〈岸〉

（三）あはれこそ　――　あはれとそ〈岸〉

（四）おもひしりけ〈り〉(る)　――　おもひしりける〈岸〉

26時苗留犢〈六七〉（菖蒲）

魏略 時苗留犢

魏の時苗は清廉のきこえあもし(り)○人(一)なり。寿春の令として任に赴く。はじめ、興車(傍記)黄牸牛、くにゝして一の犢をうみてけり。時苗、年限きわまりて任をさる時、犢をとゞめて云、此土の生せる所也。かるがゆへにとゞむといへり。

このさとにねざす沢べのあやめ草みやこにいかゞひきうつすべき（（片25）・（平24））

【傍記】

乗二薄畚車一。流布本

【校異】

（一）あもし(り)○人　――　ありし人〈岸〉

27常林帯経〈四五七〉（早苗）

魏畧 常林帯経

常林わかくして書生たりき。漢のすゑに世おほきに乱て人やすき事なかりけり。時に常林田野に籠て書を身にそへて田を作けり。其妻かれいひをもて行て、敬ふ事主のごとくしけり。後に位大常の博士にいたりにけり。年八十三にてうせにけり。

しづみてもふみゝる道をうれしとや山田のさなへおもひとりける（（片26））

【校異】

ナシ

28高鳳漂麦〈四五八〉（晩立）

後漢 高鳳漂麦

後漢の高鳳勤学の人なり。其妻とかくして貧き世をわたりけり。麦を庭にさらして雀鶏を追へとて竿を高鳳にあたへて妻は市へ出にけり。時に雨俄に降てむぎながれにけり。妻いちよりかへりて大にうらみければ、我あやまてり、書を読つる程に雨のふる事も麦のながれつらむ事もわすれにけりと云てわびなげきけり。おほやけきゝ給て文道にこゝろざせる事をほめ給て車をやりて召どもいつはりのがれてまいらず。妻と田を作て籠ゐにけ

り。
ゆふだちの庭のちぎりもわすれ水ふかきながれをくむとせしまに（片27）

【校異】
ナシ

29陸続懐橘〈一四〇〉（廬橘）
呉志陸績(一)懐橘
陸績(一)、六歳にして袁術が許に行けり。橘を取出たりけるを、陸続、ふところに入ておがみけり。袁術とひければ、母にあたえむためなりとぞ答ける。
たち花のまだうらわかき梢にも身にしむ風の色はありけり（片28）

【校異】
(一)(二)陸績 —— 陸続〈岸〉

30車胤聚蛍〈一九四〉（螢）
車胤聚蛍　【割注】
車胤、わかゝりし時、書を好て読に、家貧くして油なかりければ、蛍を集て、絹の袋に入て、燭とせり。後に司徒にいたりにけり。
ひとま○をあけもはてぬか(一)あけにけりほたるをともす夏の夜のそら（（片29））

【割注】
晋代大臣也。河東人也。位至(二)大司空(一)。同人、晋書五十三巻(二)。

【校異】
(一)はてぬか —— はてぬに〈岸〉
(二)五十三巻 —— 五十三巻〈岸〉

31卞和泣玉〈九四〉（蟬）
卞和泣玉　此事、異説甚多。
楚人卞和、楚山の中にて一の玉璞をえて厲王に(一)（文カ流布本）たてまつる。玉作にみせらるゝに、石なりと申。王いかりて卞和が左の足(二)（右カ流布本）をきられぬ。後に武王、位につき給ぬ。卞和、又此玉を奉る。玉作にみせらるゝに、是はさきにも捨られたりし石なりと申す。王いかりて、左(右)の足(三)をきられぬ。後に成王(文流布本)、位につき給ぬ。卞和あらたまを懐て、楚山のふもとに三日三夜血の涙をながして泣ゐたり。王、此事をゆへあるらむとさとりて玉を召て、玉作に仰てみがゝせらるに(四)、光上古にすぐれて和氏璧(五)とぞ聞えける。琴操(非本文)云、卞和が玉、始は懐王に奉つる。次に平王に奉つる。次に平王の子、位につきて、玉をみがきあらはされて、卞和を陵陽侯(六)となさるれども、辞してさりぬといへり。
日にみがくみねのこずゑになくせみのこゑこそ玉のひかりなりけれ（（片30）・平27）

【校異】
(一)厲王に(文カ流布本) —— 文王に〈岸〉
(二)左の足(右カ流布本) —— 右の足〈岸〉

(三)左(右)の足 ―― 左の足〈岸〉
(四)みかゝせらるに ―― みかゝせらるゝに〈岸〉
(五)和氏璧 ―― 和氏璧〈岸〉
(六)陵陽侯 ―― 陵陽隻〈岸〉

32 田単火牛〈一六三〉(蚊遣火)

史記 田単縦牛

田単城を守て燕の軍をふせぐに、牛千頭を取て、赤き〈かゞり(絳 繒 衣)〉(一)に五色の(二)絵かきてきせて、角に油をそゝげり。其上に兵刃(三)つけたり。尾に葦をつかねて、其さきに火をつけて夜牛を放て、壮士五千人をしりに立ておはしむるに、千頭の牛、火のあつくなるにしたがひて、吽いかりて燕の軍の中に走り乱れ入て(四)、兵しかしながら騒ぎにどふ(五)龍かとのみぞみえける。牛のあたるところ死傷せずと云事なし。田単に賞を行はれて平侯君とす(左・安平君印本)(六)。

なにはがたあしおりくぶるかやりびの煙をうしとおもひけるかな(**片31・平28**)

【校異】
(一)〈かゝり(絳 繒 衣)〉 ―― かゝり〈岸〉
(二)五色の ―― 五色に〈岸〉
(三)刃 ―― 刃を〈岸〉
(四)乱れ入て(に) ―― 乱れ入に〈岸〉
(五)騒きにとふ(まど) ―― 騒きまとふ〈岸〉
(六)平侯君とす ―― 平隻君とす〈岸〉

33 黄香扇枕〈四四二〉(扇)

後漢 黄香扇枕

黄香は孝子也。夏の日のあつきには〈母(父本文)〉の(一)枕をあふぎ、冬の嵐のさゆるには母(父本文)の床をあたゝめけるなり。九歳にて母にをくれて悲びうれへければ、里の人きたりつどひて助けあはれびけり。

あふぐべき人なき身こそかなしけれおなじまくらに夏はきにけり(**片32**)

しでの山こを思ふやみの枕にも(二)扇の風を思ひはつらん(**平29**)

【校異】
(一)〈母(父本文)〉の ―― 母の〈岸〉
(二)枕にも ―― 枕〈を(に)〉も〈岸〉

34 西施捧心〈一五一〉(夕顔)

荘子 西施捧心

西施はみめかたちたぐひなかりし女也。病に臥てむねをゝさへて(捧ササヘ)目をひそめければ、いよ/\こゝろぐるしくいたはし(心ムネ)きさまなりけり。其里のみにくき女ども、是をうらやみて、そらむねをやみて目をひそめけり。西施が顔色こそいかなるにつけてもいみじくあてなりけり(一)。みにくき人、目をひそめける病すがた、いとおそろしくぞ見えける。

ゆふがほのたそかれどきのそらめにもたぐひにすべき花のなきかな(**片33・(平30)**)

【校異】

（一）あてなりけり ―― あてなりけれ〈岸〉

35 魏顆結草〈一五四〉（夏草）

左伝 魏顆結草

魏顆は武子が子也。武子に寵妾ありけり。【傍記】【頭注】武子、病つきける始に魏顆をよびて、吾死なむ後は、此妾を汝が妻にしていとをしくせよと云けり。其後病をもく成てもとの心もわすれて、我しなば、妾をも殺て同ひつぎに入よと云て、武子死にけり。魏顆おもはく、狂乱の時のことをもちゐるべきにあらず。正念の詞に随はむと思へり。さて妻にしてけり。後に秦の国の晋の国とみだれ戦に、魏顆、晋の将として秦の軍にむかひあふに、旅宿の夢の中に一人の翁、草を結て秦軍をふせぎて去ぬ。朝に秦の軍、大に破にけり。其夜の夢に此翁又来て、我は汝が妻の父なり。汝、道を知りさとりあるゆへに我むすめをころさずありしうれしさに、来てむくひつるなりと云つゝ去ぬ。さめて後、此事を思ひあはせけり。

夏くさのなびくすゑ葉をみつるかなしげみをむすぶ夢の枕に

（片34）

【傍記】

必嫁セシメヨレ是ヲ　本文

【頭注】

以他嫁為自嫁誤矣。

【校異】

ナシ

蒙求倭歌第三

秋部廿首

張翰適意立秋　郝隆曬書七夕　季倫錦障萩

袁翰却座女郎花　廉頗負荊荻　楊脩捷（一）対薄

息躬歴詆刈萱　廉范五袴蘭　蘇武持節雁

鳴鶴日下五鹿嶽々イ　士龍雲間鹿　楊宝黄雀露

公超霧市霧　顔駟蹇剥椹　鄭荘（二）置駅駒迎

真長望月月　伯瑜泣杖搏衣　軻親断機虫

桓景登高菊　離朱明目紅葉　秦彭攀轅暮秋

【校異】

（一）捷対 ―― 捿対〈岸〉

（二）鄭荘荷 ―― 鄭荘〈岸〉

36 張翰適意〈四八七〉（立秋）

晋書 張翰適意

張翰、斉王にめされて東曹掾たりき。斉にある時、秋風の颯然として初ていたれるに、江南の菰菜のあつもの、鱸魚のなますを思出て、俄にかへらむとす。人、留れどもきかず。人のたのしぶ事、心に適（カナフ）（一）をよしとす。公、事に羈（ホダサ）れて数千里に（二）わしりて、官位を求てなにかせんと云て江南にかへりぬ。其後ほどなく斉王ほろび給にければ、時の人、張翰は世ひさしかるまじき事を兼てさとりて去にけるなりとぞ云ける。

ふるさとのなにはの浪におもひたつおりしも袖に秋のはつかぜ（片35）

【校異】
（一）適（カナフ）――叶〈岸〉
（二）に――を〈岸〉

37郝隆曬書〈七二〉（七夕）

世説郝隆曬書　【割注】
郝隆、文道に賢にして、広く学び深くさとりし人也。七月七日たなばた祭に、余人書を曬（サラ）しけり。文章をえんがためなり。時に郝隆、庭に仰（アフギ）ふして、腹をさらしけり。人、其ゆへを問ければ、我腹の中なる書をたなばたに借なりとぞ言ける(一)。七夕に身をぞかすべきこゝろよりほかにはふみのあらばこそあらめ（片36・平33）

【割注】
私云、郝隆、字ハ仕治(二)也。(三)

【校異】
（一）言ける――答ける〈岸〉
（二）仕治――泣治〈岸〉
（三）〈注記末尾に〉佐理ィ〈岸〉

38季倫錦障〈三四七〉（萩）

晋書季倫錦障　晋代人。
季倫は石崇が字也。家とみ財豊なりける(一)。時に、王愷と云人、紫糸布紫(二)の歩障(三)をつくる事、四十里につゞきけり。みる人、目をおどろかしけり。季倫、錦の歩障をつくる事、五十里にをよべり。かれに敵しけり。
むさしのは萩のにしきをおらぬまぞわかむらさきにしかじとは見し（片37・（平34））

【校異】
（一）なりける――なりけり〈岸〉
（二）紫（紫糸布）――〈柴（紫）〉〈岸〉
（三）歩障――歩〈陣（障）〉〈岸〉

39袁盎却座〈八三〉（女郎花）

前漢袁盎却座　【割注】
漢の文帝、上林のみゆきに、慎（シン）夫人といへる女御、かたはらにあり。袁盎、たちよりて夫人の座をしりぞけゝり。おほやけ、御けしきかはり、夫人、いかれるいろあり。袁盎がいはく、おほやけは后あり、妾あり。夫人は妾なり。妾はおほやけと床を一にする事なし。むかしの人彘がためしを思知れと云けり。夫人、此事を悟て、かへりて悦けり。おほやけ（夫人本）、袁盎が賢き心をほめて、金五十斤を賜はせけり。人彘がためし（以下非本文）といへるは、漢高祖の后呂太后の、太子孝恵をうめり。又、戚夫人が腹に趙王如意をうめり。戚夫人、御志のふかゝりけるが故に、東宮の孝恵をすてゝ趙王を位につけんときこえけるを、呂太后もなげき世の人もかたぶきにけり。張良はかりごとをめぐらして、商山の四皓を語に、四皓、山より出て東宮へ参にけり。高祖これを

見給て、四賢ひとつ心に来、たすけたてまつる事を心にくきことにおぼして、趙王を位につけ給べきことを思ひとゞめ給ぬ。高祖かくれ給て後、孝恵、位につき給ぬ。呂大后、趙王をうしなひ、夫人を失はむとするを、孝恵帝、なさけふかき心にて此事をさとりて、趙王を身にそへ、夫人をはぐゝみ給へども、帝、弓い給ふおり、趙王のひとりゐ給へるを伺て、鴆酒(チンシュ)をのませて殺してけり。夫人をば足手をきり身(一)をふすべ、薬をぬりて鬼の様に作りなして、廁の下に置て人彘と名づけけり。恵帝、悲び愁へ給けり。鴆酒と云は、毒酒なり。鴆と云鳥あり。虵をのみくらふなり。其鳥の毛を入たる酒なり。又、鴆の羽を酒に入て、のませてころせりともいへり。恵帝、此後、世の政をおこなはず、病に沈み給にけり。人彘が霊、呂后を取殺てけり。父呂公、昔、呂后を見て云、幸貴の身なれども、千夫の相ありと云りけり。高祖一人の外にみえたる人なくして死しぬ。墓におさめて、帳床屏風のかざり、いけりし時のごとし。翌日、狩猟の人千余人、たかをすへ犬をひきて、雨にあひて日くれぬ。つかを破てをの〳〵あつまりやどれり。内に美人あり。ものいふ事なし。其身を捜(サグ)るに膚(ハダヘ)あたゝかにして、なつかしきにほひありければ、ひとりふたりちかづきあひにける程に、見うらやみつゝ我も〳〵とあらそふほどに、九百九十九人にあたるたび、其身とけ失にけり。狩人、たれと云事をしらず。後にこそ(二)呂后とはしりにける。高祖を加て千夫の相むなしからずぞありける。

をみなへし玉のいがきはこゝろせよさてぞむかしも宿(三)にしほれし（（片38））

【割注】

私云、袁盎、字は子〈孫(糸)〉(四)也。

【校異】

(一)身 —— 耳〈岸〉
(二)後にこそ —— 後にそ〈岸〉
(三)宿 —— 露〈岸〉
(四)子〈孫(糸)〉 —— 子孫〈岸〉

40 廉頗負荊〈五二一〉（荻）

史記 廉頗負荊

趙の将軍廉頗、藺相如〈可(ガ)〉(一)賤位にてかみにある事を憤けり。相如この事を聞て、廉頗が出る時は病といひなしていでざりけり。後に道に出て行あひにけり。藺相如、車を退けてかくれ去ぬ。舎人が云、廉頗悪言をいだせり。庸人猶はづべし。況や将軍として、をそる事ふかゝるべきにあらざるをやと告しらせけり。相如が云、我秦王の威ありしをだにも往てなをしづめき。廉頗をおそれをづるにあらず。秦の我国趙をせめぬ事は、我と廉頗とふたりの将軍あるを怖る故なり。たとへば二虎戦ひあらそはゞ(二)、その勢ともにいくべからず。我国のために身をすてん事を先にして、私の敵をむくゐん事を後にすと答けり。廉頗、此事をもれ聞て、恥かなしみて荊(スハヘ)を負て相如が門にいたりてつみを謝しけり。以(以下本文ナシ)て、少人宜く浅軽にして敢て侮(アナドラン)二君子一焉。

ともすればそよぐしぐれのをとかへてのきにおれふす萩(荻)(三)の下かぜ（（片39・平36））

【校異】
(一)〈可〉 ―― か〈岸〉
(二)あらそはゝ ―― あはゝ〈岸〉
(三)萩 ―― 荻〈岸〉

41 楊脩捷対〈二一九〉(薄)

後漢 楊脩捷対

楊脩、魏王曹操が主簿たりき。江南にいたりて曹娥が碑の文をみるに八字あり。黄絹幼婦外孫虀臼とかけり。曹操是をさとりえず。楊脩しれりといへるを、しばしと云てありし(一)。ゆく程に三十里にしてさとりえたり。先楊脩にとかしむるに、楊脩が云く、黄絹は色の糸なり。色の糸は絶の字也。幼婦は少女也。少女は妙の字なり。外孫は女子也。女子は(二)好の字也。虀臼は受辛也。受辛は〈舜〉(三)の字也。四字につゞめて絶妙好辭と云へり。曹操これを聞て、我さとれるがごとしとほめけり。

【頭注】

みるからにしるとやはあらぬいとすゝきほどへてたれか思ひときける(片40)

見るほどもなかりし野べの秋風に露もおときぬ(四)糸薄かな(五)

(平37))

【頭注】
本文 碑背ニ有ニ八字一。

【校異】
(一)ありし ―― 案し〈岸〉
(二)女子は ―― 女子〈岸〉
(三)〈舜〉 ―― 辭〈岸〉
(四)おときぬ ―― おとさぬ〈岸〉
(五)糸薄かな ―― いとすゝき哉ィ〈岸〉

42 息躬歴詆〈六四〉(刈萱)

前漢 息躬歴詆 【割注】

漢書云、息躬は容姿うるはしく、心人に恥られたりき。世に佞臣は進み賢人は退く事を、よのつねの詞にはかたぶきけり。丞相、王嘉をばすくよかなるにゝたれども、蓄縮たり。もちゐるべきにあらずといひ、御史大夫賈逵をばよは〳〵しくて、其職に堪ずと云ひ、左将軍公孫禄、司隷(一)鮑宣をば、皆外にはすなほなるきこえあ〈る〉ども(二)、内にはをろかなる心ありて、政の道をさとらず。時の諸官、いづれも頑にしてかぞふるにたらず。俄に強き兵の、世をえたらんとせんに、誰かしづむるはかりごとをめぐらさむとぞ世をそしれりける。

ゆふ風のふきもみだらばいかゞせんまがきあだなる庭のかるかや(平38))

【割注】

私云、息夫躬、字ハ子微(三)、詆ニ大臣一云。

【校異】
(一)司隷 ―― 司穎〈岸〉
(二)あ〈る〉とも ―― あれとも〈岸〉
(三)子徴 ―― 山徴〈岸〉

43 廉范五袴〈五八〇〉（蘭）

後漢 廉范五袴

廉范、蜀郡の太守にうつりて事を行ふ。国豊に民やすからむ事をのみおもへり。さきの司が事に触て国を乱りけり。夜火をふせぐにも、人の煩をなしけり。廉范は先の政をあらためて、人を憐ぶ心ふかゝりければ、家々に水を設て火をふせがしむれば、人の煩なし。時に、民うたひて云く、

廉叔〇来（度）ルコト、何暮（ナンゾヲソカツル）。不レ禁、【傍記】人安措（イツクンゾヲキドコロアラン）。昔日ハ無二一ノ襦（ウスギヌ）、今ハ有リ二五ノ袴（ハカマ）一。

日にそへて秋のあはれはおほえ山いくのともなきふぢばかまかな（**片41・（平39）**）

【傍記】

レ火安（ズ）作ヲ平生　流布本

【校異】

ナシ

44 蘇武持節〈二六九〉（雁）

前漢 蘇武持節

蘇武、漢王（武帝）の使として、匈奴をせめに赴て忠節をつくす程に、かへりてゑびすに取籠られにけり。匈奴の王単于、蘇武をおびやかしてしたがへんとするに、漢の節をうしなはずしてひざまづかず、猶、剣をかゝやかして責れども、蘇武堂々として云、我、漢の使なり。ゑびすに随にはこざりきと答て、剣を取て自刺（ラサス）に、匈奴大に驚て取はないて(一)、疵に薬をつけて助てけり。後、深窖（カク）【傍記】の中に籠てをき(二)てけり。僅に雪ばかりをくひて命をいきけり。七日をすぎて聞（ヒライ）て(三)見に、蘇武つつがなし。ゑびす、蘇武を神なりと思ひなりぬ。北海の辺に〈出（徒本）〉て(四)羊をかはするに、漢の節を失はず。わづかにいけるに似たりといへども、牡羊に乳を期（キ）して歳花空くかさなりにけり。武帝かくれ給て、昭帝の世になりて、帝の使、匈奴(五)の国にいたりて蘇武をたづぬるに、はやく死にきと偽答へけり。いまだありとばかりをだに憲里の人にきかればやとおもふもかひなし。秋の空をむかへて、都のかたへゆく雁の足に文をむすびつけてけり【頭注】。雁、南をさして飛去ぬ。帝、上林苑にあそび給おりしも、賓雁、書をかけていたれり。取て見給に、蘇武さりてよりのこのかた十九年の愁を書つけたるなりけり。限なく哀とおぼしめして、慥に蘇武をたてまつるべき由せめられて、其時かへしたてまつりてけり。あまたの年を隔てければ、顔の色衰て、頭白く成て、ありしにもあらずぞなりにける。

蘇武入胡年、漢武帝四十二年（壬午）、本朝開化天皇五十九年也。蘇武帰レ漢年、漢照帝六年（庚子）、本朝崇神天皇十七年也。

へだてこしみやこの秋にあはましやこしぢのかりのしるべならずは（**片42**）

さても猶ふみかよふべき雲路かははつ雁がねのたよりならずは（**平40**）

【頭注】

本文 常恵教ヘ漢使者ニ言（シムラク）、天子射二上林ノ中ニ一得（タリ）三雁足ニ有ヲ帛書ヲ。言（ス）レ在（ト）二某ノ沢中ニ一。由レ是ニ得レ還。

【傍記】
ツチグラ

【校異】
(一)はないて ―― はなちて〈岸〉
(二)籠てをき ―― 籠〈て〉をき〈岸〉
(三)聞(ヒライ)て ―― 開(徒本)て〈岸〉
(四)〈出〉て ―― 出(匈)て〈岸〉
(五)匈奴 ―― 〈匈〉奴〈岸〉

45五鹿嶽嶽〈二八八〉(鹿)

前漢 五鹿嶽〈々〉(一)　或本此一段無之。

五鹿君、字は飛字(君孟本)といへり。権威世にしられ、談説、名をえたる人也。朱雲と云人、口弁あり。これをくじくものなし。共に評(アラソフ)て事を論に、五鹿君つまりぬ。時人の云、五鹿嶽々たり。朱雲(其)○角を折といへり。

くも井よりのはらの草をふく風にあれふす(二)しかのこゑきこゆなり(片43)

【校異】
(一)五鹿嶽〈々〉(々) ―― 五鹿嶽々〈岸〉
(二)あれふす ―― おれふす〈岸〉

46鳴鶴日下・士龍雲間〈四九・五〇〉(題無し)

鳴鶴日下　士龍雲間

鳴鶴と士龍とは、共に才智きこえ高かりし人也。此二人かたみに見しらざりけり。時に(一)張華と云人の許に同時に行あひにけり。大才の人ゆきあふこと、ありがたき事也。よのつねの詞をいだすべからずと、かれこれをすゝめけり。時に一人はすゝみ、一人はしりぞくにゝたり。いづれもいみじくみえけり。士龍が云、我は雲間の陸士龍也。鳴鶴が云、我は日下の荀鳴鶴也と。士龍又云、既に開(テ)二青雲(ヲ)一覩(ミル)二白雉一、何ッ不(ル)下張二尓弓(ヲ)一挾(ハサミ)中尓(ガ)矢(ヲ)上。張公が云、荀何ッ(ヲ)をそきやと。鳴鶴答て云、本(モト)は謂(キ)、雲龍騏々(キタリ)と(二)。今は乃(チ)山鹿野麋(ナリ)。獣ハ微(ニシテ)(三)弩(ユミツヨシ)強。是以(テ)発遅(シ)と。張華大に咲て興にいりけり。

あづさゆみいるのゝをじかこゑたてゞこゝろよはしとつまにみゆらん(平41)

【校異】
(一)時に ―― 〈時に〉〈岸〉
(二)騏々(キタリ)と ―― 騏々(キタリ)〈岸〉
(三)微(ニシテ) ―― 弱(ク)微(ニシテ)〈岸〉

47楊宝黄雀〈二六一〉(露)

楊宝黄雀

後漢の楊宝、九(七本)(一)歳にして華山の中に行て、二(二)の黄雀の疵をかうぶりて、蟻(アリ)につ(ヒ)かま(レ)れたるをみる。楊宝あはれび、取て家に返りぬ。箱の中に入て飼に、五穀をくはす。黄花の(花)○ぶさを取てかひやしなひて、十日をすぎて疵いえにけり。朝に去て夜半に来て、箱の底にとまれる事、良久し。後に変じて黄衣の少年の人と成て来て、白環一双をもて来て、楊宝にあたへて云、

此玉をたくはへて(三)、汝が子孫をかさねて三公となるべしと云て去ぬ。後にたがふ事なし。
続斉諧記云、黄衣ノ童子、楊宝に向て再拝して云、我は西王母が使なりき。君が仁愛を感て、白環四枚をあたふるところなりといへり。
わがかどのわさだのすゞめたつ跡のいなばにをける露のしら玉〈**片44**・(**平42**)〉

【校異】
(一)九七本 —— 七〈岸〉
(二)二 —— 一〈岸〉
(三)たくはへて —— た〈て〉はへて〈岸〉

48公超霧市〈一六一〉(霧)
後漢 公超霧市 張楷字
後漢の公超は、長階が子なり。術道にかしこかりし人也。普く為ニ五里ノ霧ヲ。学者随レ之ニ、所レ居成レ市ヲ。故ニ花陰有ニ公超市一いへり。時に関西の人、裴優、三里のきりをつくれりけり。
公超本文 本文ナシ
へだつれどはなゆく(一)色にみるものを人のこゝろのあきゞりのそら(**片45**)・(**平43**)〉

【校異】
(一)はなゆく —— はれゆく〈岸〉

49顔駟蹇剥〈二八四〉(槿)
漢武故事 顔駟蹇剥
漢の武帝、昔シ輦にのりて、至ニ郎署一、ひとりの老郎○の鬢眉白きを見て問ひ給に、顔駟申て云、文帝の時の郎たりきとなのり申けり。年はるかにたけにけるまで世にあはざりけるゆへを重てとはるゝに、答申云、文帝は文を好み給き。我、武をこのむ。景帝はみめを好み給ひき。我かほみにくし。君はわかきをこのみ給。我すでに老たり。この故に三代あはざるなりといへり。おほやけ、この詞を哀とおぼして、会稽の大守になされにけり。
蹇剥非本文、蹇は難也。険也。剥は不利有欣、少人長也。
つゐにかくはかなく秋にあひにけりよゝにしほれし庭のあさがほ(**片46**)〉
おもへたゞ日かげにあはぬ朝貌のよゝにしほれしおひの末ばを(**平44**)〉

【校異】
ナシ

50鄭荘置駅〈四二〉(駒迎)
前漢 鄭荘置駅 **【割注】**
鄭荘は孝景帝の時の人也。毎ニ五日一洗浴すと云へり。いはゆる一月に五日、一一(一)年に六十日をいとまのひまとす。鄭荘、家に天下の名人を集めて、湯を沸して、昼はひぐらし夜はよもすがら、思さまに遊て心をよろこばしめけり。人々のゆきかへる馬のつかれをかへり見て、長安城の外の四面の郊にむま屋をおきて、伝馬をたてけるなり。
いくたびか駒ひく秋をむかへこしあふさか山の関の旅人(**片47**)

もち月のこまひく秋をむかへきて思ふ人にもあふ坂の関（平45）

【割注】

私云、鄭荘字ハ当時、陳留ノ人也。又云、孝景ノ時為二舎人一。

【頭注】

一

【校異】

（一）二 —— 一〈岸〉

51 真長望月〈五二六〉（月）

晋書 真長望月

真長と玄度とはなさけふかく、色をしれる友也。花の春、紅葉の秋、志を通ぜずといふことなし。月のくまなき夜、真長、簡文が所許（二）に往て遊に、真長、愁然として歎ジテ云、清風朗月に恨らくは玄度がなき事をといへり。玄度をばすきものといへり。いかにせんともなき月に袖ぬれておもはぬさとにあり明のそら（片48）

【校異】

（一）所許 —— 許〈岸〉

52 伯瑜泣杖〈四一六〉（擣衣）

説苑 伯瑜泣杖

伯瑜、いとけなき時、心にたがふ事あれば、母つえしてうちけり。伯瑜、杖をうけて痛み泣ことなし。母老て後にまた伯瑜をうつに、伯瑜、大に痛みなきけり。母の云、我昔うちしに泣ことなかりき。今更に泣こと、我をうらむる心あるべしとあやしみいへり。伯瑜答て云、母のわかくてうちし杖はつよくあたり身にしみしかども、いたまざりき。今（二）杖を痛み恨るにはあらず。杖のよはくあたるにつけて、齢の衰へ力のつきはてたる事をうれへなくなりといへり。母これを聞に、せんかたなく哀と思ひけり。

秋のよの老のねざめにうつ衣よはるひゞきはいかゞかなしき（片49・（平47））

【校異】

（一）今 —— 今も〈岸〉

53 軻親断機〈一三四〉（虫）

軻親断機

軻親は孟母也。孟軻が母也。孟母が家の傍にふるき墓あり。孟軻いとけなきおり、戯てはかをつきけり。母わが子にあしき事をならはさじとて、屋こぼちて外にうつりぬ。其傍に市あり。孟軻ものうりかふ事をしれり。母我子によからぬ事ならはさじと思て、又屋をこぼちて外へうつりぬ。その傍に学館あり。孟軻文をまなぶに器にたれり。此地を栖とすべしとおもひ定てけり。孟軻ものならひて帰来れるに、汝学ぶところいたれりやと問に、いまだしきよしを答けり。母機をゝりさして刀を〇（とつ）て機をきり〈生（す）〉てけり。孟軻驚き問に、汝が学問することは我機

をすてたらんがごとしと云に、孟軻ことはりを思ひ知て、勤学して(一)文に長じて、後に大儒の名をえてけり。

こえたてゝはたをるむしをうらみずは野べのにしきやあさくみえまし（平48）

【校異】

(一)勤学して ―― 勤学にして〈岸〉

54桓景登高〈四三八〉（菊）

続斎諧記 桓景登高

汝南の桓景、費長房に随て、道を学びて年をおくりけり。長房が云、九月九日、汝が家に禍あるべし。急に家〈に〉(一)さりて、家人をして絹の袋に茱萸を入てひぢにかけさせて、高きところに登て菊の花酒を飲べし。さて禍をさるべきなりと云に、桓景此をしへのまゝに山に登てかへりみるに、家の中の〈鶏犬〉(二)牛羊、ひと○きに死にけり。

けふはしもふもとのはなにゐひなましたかねのきくをかざゝざりせば（片51）

【校異】

(一)家〈に〉 ―― 家を〈岸〉

(二)鶏犬 ―― 猪鶏〈岸〉

55離婁明目〈三六二〉（紅葉）

離朱明目 婁流布本 慎子曰

黄帝の臣、離婁と云ものあり。離朱これなり。目明にして、毫末を百歩の外に見し也。戦国策に云、離朱、千里の内の山の梢、野べの草の色をたどる事なし。馬を千里(不審)の外にたてゝ耳の中まなぶたの中を見たるなり。

ながめやる千里の山のもみちばゝ軒のこずゑといはぬばかりぞ（片52・（平50））

【校異】

ナシ

56秦彭攀轅〈二三五〉（暮秋）

後漢 秦彭攀轅

秦彭、穎川(一)大守として任に赴て、人をあはれび国をいたはりけり。任をさる日、老たる、わかき、轅によりて、なく〳〵おしみしたひけり。

かぎりありてかへるならひはふりぬれどわきても秋のしたはしきかな（片53））

【校異】

(一)穎川 ―― 穎川ノ〈岸〉

蒙求倭歌第四

冬部十五首

盛吉垂泣 初冬　震畏四知 落葉　原憲桑枢 時雨

閔損衣単 霜　鐘離委珠 霧　孫康映雪 雪

趙勝謝蹠 寒蘆　蒼頡制字 千鳥　王覇氷合 氷

羅含呑鳥 水鳥　羊続懸魚 網代　郅都蒼鷹 鷹狩

陰方祀竈炭竈　阮孚蟬履（ゲキ）　祖約好財埋火
虞延剋期歳暮

57盛吉垂泣〈三三六〉（初冬）

会稽典録盛吉垂泣

盛吉は廷尉也。冬の節を迎ることに、誡をけるつみ人を裁注（コトハリシルシ）けり。よな〳〵見廻て(一)各が形をみるに、しもとのあとをや〈もえ（めぶ）〉るもあり(二)。かなぐ〈た（さ）〉りに(三)いためるもあり。おやを恋ひ子をこふるもあり。寒をうれへ飢をうれふるもあり。盛吉は筆を取てなき、妻は灯を取てなく。共に涙をながしけるなり。

ともしびのかげさゆる夜のあくるまで人のやみとふ冬はきにけり（片54・（平51））

【校異】

(一)見廻て ―― 目廻て〈岸〉
(二)や〈もえ（めぶ）〉るも ―― やもえるも〈岸〉
(三)かなく〈た（さ）〉り ―― かなくさり〈岸〉

58震畏四知〈一八五〉（落葉）

後漢震畏四知

楊震、東莱の大守として任に赴に、昌邑と云所をすぎけり。昌邑県の令、王密（ヒツ）といへるは、昔楊震が秀才に挙せし人なり。王密、金を懐に入て、夜来て是をあたふるに、楊震うけず。王密が云、むかしのなさけをむくゆるなり、人のしるなければ、世にきこゆべきにあらず、とねんごろにいへり。楊震答て云、天しれり、地しれり、汝しれり、我しれり、すでに四知ありとて終にうけず。

ちらさじといはせのもりの紅葉ばもあらしはそらにしらずしもあらじ（片55）・（平52））

【校異】

ナシ

59原憲桑枢〈四〇四〉（時雨）

荘子原憲桑枢

魯の原憲、家貧くして、蓬の戸の蓬戸不○（レ）完本あだなりければ、桑の木を枢とせり。板まには雨もたまらずして、とこも朽ぬばかりになりにけり。常に絃歌に心をすましてのみぞなぐさみける。

あとゝづるくわ(一)のとざしの夕ぐれをしぐれならではとふ人ぞなき（（片56））

【校異】

(一)くわ ―― く〈も（わ）〉〈岸〉

60閔損衣単〈二九六〉（霜）

旧註云閔損衣単

閔損は孝子也。父、後の妻の腹にふたりの子あり。後の妻、閔損をにくみて、我ふたりの子には綿入たる衣をきせ、閔損には蘆の花を入たる衣（ムナガイ）をたゞ単へきせたり。冬の夜、父の車をよするに、手こゞえて鞅をおとしてけり。父、せめて罪にをこな

ふに、答る事もなし。後にちゝ、後の妻の、まゝ子のためなさけなきことをさとりえて、わかれ去なんとするを、閔損なげきて云、母のおはするには一子こそさむけれ。母なくは三人の子さむかりなむ云に、父ことはりを知て、思ひたゆみてけり。まゝ母、このなさけをうれしとおもひて、三人の子をおなじさまに孚けり。【割注】

よもすがらつるのけごろもしもふ〈け〉て(一)あしのはがくれ子をおもふこゑ（(平54)）

【割注】

侍スル事三子一平均成二茲母一。流布本

【校異】

(一)ふけて ―― ふけて〈岸〉

61 鐘離委珠〈四〇六〉(霰)

後漢 鐘離委珠 後漢ノ人也

鐘離意、字を子阿といふ。顕宗、位につきて、召て尚書たりき。時に、交趾の〇太平守(一)ぬすめる物をあかふ(二)事あり。おほやけ、この物を群臣にわかち給に、鐘離、たまをみて(三)、地に委けり。公、その故を問ひ給に、答申て云、孔子忍二渇一於盗泉之水一(三)、曾参廻二車於勝母之閭一(四)。是皆うき名をにくむゆく(四)なり、と申せり。おほやけ、これを聞給て、賢なるかな尚書、とほめ給て、くらの銭三十万(五)を賜て、右僕射になされにけり。

盗泉はぬす人のいづみとかけり。孔子、水にうへたれども、その水をのみ給はず。勝母閭は、母にかつさとゝかきたり。曾参、いそぐ道なれども、そのさとをよぎてすぎき。みなその名をいとふゆへなり。

此段に、歌落之。

【校異】

(一)交趾の〇太平守 ―― 交趾の守〈岸〉
(二)あかふ ―― あかふ〈岸〉
(三)みて ―― えて〈岸〉
(四)ゆく ―― ゆへ〈岸〉
(五)三十万 ―― 三十万〈岸〉

62 孫康映雪〈一九三〉(雪)

孫氏世録 孫康映雪

孫康家貧くして油なかりければ、映レ雪書を読けり。わかゝりし時少人に交りあそぶ事もなく、文にのみぞ心をそめける。後に御史大夫にいたりにけり。

よもすがらすだれをのみぞかゝげけるふみゝるにはの雪のともしび（(片59)・(平56)）

【校異】

ナシ

63 趙勝謝蹠〈三七五〉(寒蘆)

史記 趙勝謝蹠

平原君、字は趙勝。高楼に登て人家をみるに蹠たる者、ころぼひ(二)行て、水をくみけるを、楼の上の美人、声だかに咲ひけ

り。翌日躄者ころぼひ(三)来て、水をくみて門にいたりて美人の首を乞に、わらひて与えんといふ。後に又来てせむれどももちゐず。門客(資)(三)ことゞくに去しりぞきにけり。其故を問に、君は色を愛して人をいやしんず(四)。このゆへにさり退なり、といへりけり。志ふかき女なれば、いたはしくかなしとおもへども、門客の憤にたへずして、美人の首を切て躄者のやどにかけて是を謝しけり。其後門客かへりきたりにけり。

なにはえのあしのしたおれとにかくによしなきあまのくちずさみかな（（片60）・（平57））

【校異】

（一）ころぼひ ―― よろぼひ〈岸〉

（二）ころぼひ ―― よろぼひ〈岸〉

（三）門客（資） ―― 門客〈岸〉

（四）いやしんず ―― いやしうす〈岸〉

64 蒼頡制字〈二二二二〉（千鳥）

淮南子 蒼頡制字

蒼頡は黄帝の史官也。賢才ならびなかりし人也。鳥の跡を見て文字をつくりしなり。鳥獣の跡を見て分理をさとりわきまへけりといへり。

蒼頡、字をつくりしかば、鬼夜哭しけりといへり。字に六体をわかてり。一云象形、二云象事、三云象意、四云象声、五云転注、六云仮借也。蒼頡之家(一)在(二)馮州衙県陽亭(三)、墳の高さ六尺也。書を好む者悉に此墓に来て、姓名を書ておきけり。はま千どりとびたつ跡をたよりにてふみはじめけるあまのかよひぢ（平58）

【校異】

（一）家 ―― 象（家ヘ）〈岸〉

65 王霸氷合〈四九四〉（氷）

後漢 王霸氷合

漢記云、光武邯鄲より王莽が軍をさりて、南の方曲陽に下て呼沱(諱本)(一)をわたらむとするに、水はやく船なしといへり。左右の人をのゝきおそれけり。時に王霸を遣て(二)みせらるゝに、はかりごとをめぐらして、氷固く結て渡ぬべしと申に、衆人大に悦てならびわたりにけり。

たび人のこまわたすべき浪ぢかはつらゝのうへとおもひなさずは（頭注）

駒わたすつらゝのみちをしらせずは思ひよるべき浪のうへかは

【頭注】

河ノ氷亦合（アヘリ）云云。氷柱ツラ、

【校異】

（一）呼沱（諱本） ―― 呼沱〈岸〉

（二）遣て ―― けて（遣）〈岸〉

66 羅含呑鳥〈四一〉（水鳥）

羅含呑鳥

晋書羅含いとけなき時に、夢に、五色の馬(鳥)飛て口に入と見てさめて後、むねの中に物を呑たる心ちしけり。羅含母に語に、汝文章あるべき由をあはせけり。其後才藻日々に(新)なり、といへり。羅含が家の庭に、俄に蘭おひいでけり。徳行幽感と思へり。なづけて書帯〈章(草)〉(一)といへり。

水とりのうきねの夢のなごりよりなゝ(七)のこゝろもふかくなりにき（(片62)）

【校異】

(一)馬(鳥)――鳥〈岸〉

(二)〈章(草)〉――草〈岸〉

67羊続懸魚〈六八〉（網代）

後漢羊続懸魚　私云、羊続、字ハ興祖也。

後漢の羊続は南陽郡の守也。羊続が許へ主簿生魚(ナマンキ)を送れり。羊続うちへも取いれず庭にかく。程(ホド)へて主薄、又魚を送れり。もとの魚をみせて、其心をとゞめてけり。

いとはるゝみをうぢ川のあじろ木にねたくぞひをの思ひよりける（(片63)）

【校異】

ナシ

68郅都蒼鷹〈一一〉（鷹狩）

郅(アウ)都(ツ)蒼鷹　【割注】

郅都、直諫にして人に恐るところなく、時の大臣をも横(ヨコシマ)なる事あれば、憚ところもなくいひそしりけり。世の人目をそばめて蒼鷹と名づけてけり。郅都、雁門の大守に遷て、匈奴をしたがへけり。匈奴、木偶人を作て郅都と名て、弓箭をとり、馬をはせてくるに、時にのぞみて、郅都ぞと思ふより、心まどひ手わなゝきて箭を放事あたはず。人におぢられたる事かくなむありける。

はしたかのかげうつるらしいり日さすかたのゝ〈草(原)〉(一)に人さはぐなり（(片64)）

【割注】

河東人也。私云、郅都、字ハ巨中。

【校異】

(一)草(原)――草〈岸〉

69陰方祀竈〈四二二〉（炭竈）

後漢陰方祀竈　後漢人也。

陰子方、孝養ふかゝりし人也。年のくれに黄牛(一)をもて竈神をまつりて、三代の孫にいたるまで富さかえけり。

いまぞしるよにすみがまのしるしとて行すゑとをくたえぬけぶりを（(片65)）

【校異】

(一)黄牛――黄帝〈岸〉

70阮孚蠟履　祖約好財〈三三九・三四〇〉（埋火）

晋書 阮孚蟻履(ゲキ) 祖約好財 晋代人。

阮孚はあしだを好み、祖約は財を好みし人也。常に是をいとなむ事相同じ。人ゆきて二人が得失をはかるに、まづ祖約が許に行てみれば、財屏当して、〈簾(小倉本)〉をうしろにあてゝ、身をかたぶけて、かくしそばめて、其けしき心よからずに(又厳)(一)、阮孚が許に行てみれば、火をふきて蟻履ヲ、なげきて云、しらず、一生のうちにいくばくの履をかもちゐんとする、といへり。神色恬然として閑暢せり。此時に阮孚は得、祖約は失と定てけり。

屏当去(二)屏当(二)ともかけり、たゝみ、のし、をさだむるなり。きえかへりおもふもかなしうづみ火のいけるあしたのほどもなきよを（片66・平60）

【校異】

(一)に(又厳) —— 次に〈岸〉

(二)屏当 —— 屏イ当〈岸〉

71 虞延刻期〈三三五〉（歳暮）

後漢 虞延剋期 後漢人也。

虞延は細陽の令也。獄舎にいましめをかれたるもの、数もしらず多くして、年のくれに臨て、幽閉をかなしみ故郷をこふる心ねんごろなりけるを、哀び痛て獄門を開て、をの〳〵をゆるして、其ころほひまでとたのめて、家に帰しするゑけり。罪びと、虞延が仁徳をあをぎて、期をたがへず獄にかへり来にけり。家にありて病あるものゝ(一)獄に来て死ければ、閣外(四本)(二)にうづみ、わざの事をおへて、あはれび訪ひけり。後に大尉にいたれりけり。

としのくれはしものとざしをとくものをあくる日かげのなさけなりけり（片67）

【校異】

(一)病あるものゝ —— 病あるものは〈岸〉

(二)閣外(四本) —— 閣外〈岸〉

［附記］

本翻刻は、二〇一一年度大阪大学日本語日本文化教育センター特別研究費（Ⅱ）の成果の一部である。翻刻の掲載許可を賜った山口県立山口図書館に厚く御礼申し上げる。また、蒙求和歌輪読会（二〇〇六年四月開始）の参加諸氏、特に人形寺英利子氏には編集の過程で多大な協力を得た。ここに附記し、深謝申し上げる。

（こやま　じゅんこ・天理大学文学部講師）
（たけしま　かずき・立命館大学非常勤講師）
（つた　きよゆき・大阪大学日本語日本文化教育センター准教授）
（なかしま　まり・洛星中学校非常勤講師）
（はまなか　ゆうこ・京都学園大学非常勤講師）
（もりた　たかゆき・南山大学人文学部講師）
（やまなか　のぶゆき・本学文学部非常勤講師）